

先人の足跡に学び、 心を揺さぶられる日々をすごす

全国病弱教育研究会 顧問 駒松仁子

私が小児看護に関わったのは1975年、45年前にさかのぼります。国立医療センター（現国立国際医療研究センター病院）の小児病棟看護婦長として岡山の国立療養所邑久光明園から赴任してきたのです。当時の小児病棟には、慢性腎疾患などで長期入院の子どもたちが多く、病院や学校生活でたくさんのストレスを抱えていました。ネフローゼ症候群で小学校5年生から中学生まで入退院を繰り返していたS君の言葉は、今でも忘れられません。「誰もかれも『食べる！食べる！』と僕の気持ちを知らんと！太って苦しむのは僕。」「もし退院する時点で今より太っていたら、みんなのご飯にプレドニンを混ぜてやる！」。S君は、プレドニンの副作用でムーンフェイスになり、そのことをとても気にしていました。無理ありません。学校に行く途中、通行人に振り向かれたり、指をさされたり、学校でも笑われたりするのです。S君は、次第に元気がなくなり学校に行くことが苦痛になりました。そんなS君に生きる力を与えたのは、手塚治虫の『火の鳥』でした。壮大な歴史のなかで苦難に直面しながら、なお乗り越えていこうとするストーリーに、勇気と安らぎ、自然の恩寵を感じたのではないかと思います。

私はそれまで患者さんにとって退院がゴールだと思い、退院をひたすら喜んでいました。しかし成長過程にある子どもにとって、退院後も様々な課題に直面せざるを得ないことを知りました。病むことから生じる問題は、子ども本人だけでなく、親やきょうだい、ひいては社会全体にも繋がる深く大きな問題であり、保健・医療・教育・福祉の連携なくしては改善の道筋が見えてこないことにも気づかされました。このことは、平成元年にこの会の会長の斉藤さんたちが中心となって発足させ、20年間活動を続けた「センター子どもと共に歩む会」という小児がんの子ども親の会の皆さんとの交流を通して一層強く感じたことです。（斉藤さんは、医療センターに入院した子どもの親御さんであり、その時以来の長いお付き合いになります。）また小児病棟勤務の後、看護短期大学で学生に小児看護を教える仕事に就いてからもずっと考えさせられてきたことでもあります。

そうした中から私の関心は、約30年前頃からこうした問題を保健・医療・教育・福祉の連携の視点をもって実践的に改善しようとしてきた先駆者たちの取り組みとその歴史にも目が向くようになっていきました。なぜならば、この問題はまさに歴史的な課題であり、歴史に学ぶことで改善の糸口や手ごたえを得られると思ったからです。その先駆者の一人として三田谷啓（さんだや ひらく）の思想に、強く心を引き付けられました。

三田谷啓は大正から昭和の時代に、子どもと母親の幸せを目指して「母と涙の二等分」をモットーに、児童相談、育児啓蒙、治療教育、母性教育等、児童保護事業に奮闘した医師であり、研究者、行政官、社会事業家でもあります。例えば、1927（昭和2）年に開設された三田谷治療教育院の設立趣意書は次の言葉から始まります。

「コドモは強く、賢く、善良に育ててもらふ権利を有して居る。その権利が十分発揮できなければ大きな不幸に違いない。その不幸なコドモが驚くほど多いのにこれを保護する機関の見るべきものがないことは現今大きな欠陥と言わなければならぬ。」

三田谷啓の児童保護思想と活動の源泉がここにあると思います。

私は今年80歳を迎えましたが、平成5年から現在に至るまで兵庫県芦屋市の三田谷治療教育院

に何度も何度も足を運び、三田谷が遺した膨大かつ貴重な史・資料の整理に携わってきました。「資料にくまなく丁寧にあたること」、「事実をきちんと正確に明らかにすること」、そして「事実をしっかり伝えること」に徹するなかで、新たな発見がたくさんありました。まさに目からうろこ、歴史から学ぶことの楽しさと重要性に心が熱くなりました。これまで三田谷啓の思想については、「優生思想の影響を受けている」、「子育てを母親のみに担わせている考え方」等の批判もあります。私はそうした批判は、部分的で表層的な評価であり、さらに時代を踏まえる必要があると思っています。だからこそ三田谷啓の生涯にわたる思想と活動を明らかにし、それを後世に伝える必要があると考えています。

そして、三田谷啓が設立した施設は現在に至るまで営々と営まれており、今ようやく、『三田谷治療教育院95年史』の完成が近づきつつあります。明治に生まれ、大正、昭和の時代に於いて母性教育と治療教育、児童相談を基軸とした施設を開設し、生涯にわたり「子どもの権利」を児童保護思想と活動の中で貫いた先人の生き方、そして「母と涙の二等分」をモットーに、さまざまな困難を抱く人々に寄り添う姿勢は、現在の児童問題の解決への手がかりを示唆していると思います。私は、歴史から過去の思想や実践を学び、今につなげて、それを活かす重要性和楽しさをかみしめながら、充実した日々を過ごしています。



駒松仁子氏

参考文献

駒松仁子 福祉に生きる 40 三田谷啓 大空社

